

地域のテーマを市民の目線で



市民記者のページ

令和5年度を振り返って

市民の目線で、イベントや団体の活動などを紹介してくれた市民記者のみなさんに、1年間の活動の感想を伺いました。

各号の「市民記者のページ」はホームページからご覧ください。

【問】 広報広聴課（本庁4階）

☎ 24-2172



茨城クラフトフェア

昨年プライベートで訪れた茨城クラフトフェアの規模の大きさに驚き、実行委員会を取材しました。イベント運営の苦労や、開催に向けた工夫を知ることができ、大変勉強になりました。

市民記者の取材では、自分の知らない世界を知ることができ、多くの刺激をもらっています。来年度で活動を始めてから4年目になりますが、引き続き市の魅力を発信し続けたいです。

なかしま ひでお
中島 英雄 記者



石ころで発見した古鬼怒川

しまだ 敏 記者



筑西市の地形がどうやってできたのかをこつこつと調べ、今回やっとその謎を解くことができました。スケールの大きな話を限られたスペースにどうまとめるか苦労しましたが、取材させていただいた池田先生や市民記者のみなさんと力を合わせ、なんとか記事にすることができました。鬼怒川がどのように筑西市の地形と風土を形成してきたのかを伝えられたかと思います。

次年度は、また新たな気持ちで取材をしていきたいです。



4年ぶり開催 川島地区体育祭

なかきや ひろし
中木屋 宏 記者



爽やかな秋晴れの中、4年ぶりに開催された川島地区体育祭を取材しました。園児から80代まで約450人の参加があり「親子で参加出来て嬉しかった」などの声が聞かれました。家族の絆や、地区の親睦が深まっている様子を紹介できたと思います。

今まで取り上げた、伊讚美地域のリサイクルと野菜朝市のコラボレーションや、女方河畔にある鬼怒小貝漁協の鮭ふ化事業とあわせ、川島地区の特色や活動の一端を発信できたのではないかと思います。



石碑が伝える100年前の稲荷町通り

市民記者の活動は筑西市の今昔に触れる機会が多く、活動するたびに学びや気づきがあります。私は今年度、下館駅北口にある石碑を取り上げました。取材をとおして、街の歴史も学べた事で見識を深められ、筑西市がより一層好きになりました。

今年度で私は市民記者を卒業しますが、これからはピープルはもとより、市民記者のページを一読者として楽しみにしています。

やまくち しんや
山口 信也 記者



祖父の梨畑を受け継いだ 孫夫婦の挑戦

祖父の梨畑を継承した若い夫婦を紹介しました。取材をとおして、関城地区には生産だけでなく商品開発や販路の拡大に頑張っている農家さんがいると分かり、将来が楽しみになりました。筑西の冬のお出かけスポットで紹介した里山整備のイベントでは、自然に触れる楽しさや親子のふれあいの大切さが伝わってきました。



これからも残していきたい伝統や文化を伝えたいです。



たての としこ
館野 敏子 記者



©YETI VACATIONS



つな 後世に繋ぐ 祭りの文化



今年度は、下館盆踊り大会について記事を書きました。市民のみなさんに、祭りの魅力や文化継承の大切さを知っていただけたと思います。

地域の活性化には、若い世代に魅力を伝えることが重要です。今後も、私自身が実際に行事に参加し、自ら体感したことを発信できたらと思います。市民記者として、地域活性化の一助になれるよう、全力で取り組んでまいります。



わだ けいこ
和田 恵子 記者

ウォーキングで 健康づくり

ほしの みちこ
星野 道子 記者



年齢とともに、気になってきた体力の低下や脳の衰え。そこで今年度は、健康づくりに効果があるというウォーキングについて記事にし、私も生活に取り入れています。県の健康推進アプリ「元気アップ!りいばらき」にも登録し、歩数の目標のほか、食事や人との交流にも関心が高まりました。

市民記者となって7年、年齢や立場の異なる記者のみなさんと記事を仕上げている編集会議は、楽しい活動の場でした。ありがとうございました。



仲間と楽しむ 四つ竹健康踊り

おしま まさみ
小島 正美 記者

四つ竹健康踊りについて、協和地区で活動する「四つ竹健康踊り雅流ひらぎ会」を紹介しました。曲に合わせて仲間と踊る一体感や、休憩時間のおしゃべりなど楽しそうに活動されている様子を拝見し、これが元気の源なのだなと実感しました。

さて、次年度の記事には何を取材しようか考え中です。地域の行事や歴史ある建物など、筑西の隠れた魅力をご存知でしたらお声がけください。



想いを集めて大きな支援に 県西フードパントリー

「大変だけど、人の喜ぶ顔を見るとやって良かったと思える」という言葉がとくに印象に残り、ともすれば楽な方に動いてしまう自分を戒めるきっかけの1つになりました。苦労や工夫を重ねてやり遂げた時の充実感は、何ごとにも代え難い自分の財産になります。「大変だからこそ、やりがいがある」。自分にもできることを探しながら、今後も市民記者として頑張りたいです。



おおどまり ともこ
大泊 知子 記者

